

# み雪降る 冬は今日のみ

## 鶯の 鳴かむ春へは

## 明日にしあるらし

今日2月3日は「立春」です。その前日、2月2日が「節分」でした。「節分」とは季節の分かれ目を意味し、本来は立春・立夏・立秋・立冬それぞれの前日にあたります。現代は立春の前日の節分だけが重視されています。現代では、節分といえは2月3日という印象があります

が、2021年は12年ぶりに2月2日となりました。この歌は、暦の上の「冬」は今日までで、明日からは「春」だと詠んでいます。実際に今日は雪が降っています、明日からはウグイスが鳴くというのでは、それぞれの季節の

やまと  
万葉がたり

象徴的な事象として表現されているとみられます。歌が詠まれたのは、757(天平宝字元)年12月18日であったと「万葉集」に記されています。翌19日が立春で、この日が節分だったようです。古代日本で使用されていた暦は、月の満ち欠けを基準にしており、1月

1日に来る前に立春を迎えることもしばしばありました。2021年2月3日も、旧暦に換算すると12月22日にあたります。ちょうど今ごろに詠まれた歌だったことがわかります。当時の二十四節気は

中国大陸の自然環境をもとに成立したものでしたので、日本列島の季節感とは異なる場合があります。現行の暦は太陽の運行を基準にしていますので、さらにずれが生じます。立春の頃に大雪が降る年も珍しくはありません

みかたのおおきみ  
(三形王 卷二十・四四八八)

ん。今年も、ウグイスが鳴くところかまだ寒い日が続きそうです。三形王は、系譜も生没年も不明です。「続日本紀」の記事などから、淳仁天皇にゆかり深い人物であった可能性も指摘されています。この歌は自宅を開いた宴で詠んだとあり、甘南備真人伊香伊香王と大伴家持の歌も残っています。

【訳】み雪降る冬は今日だけです。ウグイスの鳴く春はもう明日であるらしい。

(県立万葉文化館指導 研究員・井上さやか)  
次回回は17日

# 飯喫めど 味くもあらず 行き往けど 安くもあらず

## あかねさす 君が情し 忘れかねつも

作者未詳(巻十六・三八五七)

『万葉集』巻十六は由縁(様々ないわれ)を持つ歌を集めて巻全体が構成されています。この巻の歌には題詞や左注として歌にまつわる物語が付いたものが多く、この歌にも次のような長い左注があります。

「言ひ伝えによれば、左為王の所に婢(下働きの女性)がいた。宿直が続いて夫と会うことができず、心はふさ

ぎこみ夫を恋い慕う気持が深まっていた。ある泊まり勤務の夜、夢の中で夫に会い、目覚めて手探りで抱きついたが、手に触れるものは何もなかった。彼女はむせび泣き、声高くこの歌を口ずさんだ。これを聞いた佐為王は感動してあわれに思い、以後はずっと泊まりの勤務を免除した。」

この歌語りの原文は

### やまと 万葉がたり

漢文で書かれており、唐代中国の小説『遊仙窟』の文章に由来する表現が取り入れられています。よって、この文は中国文学に通じた人物による創作の可能性が高く、歌を歌ったとされる婢も実在の人物かどうかはわかりません。しかしこの歌が奈良時代に流行し、『万葉集』にも採

録された背景には、実在の人物である佐為王の存在が考えられます。

佐為王(橘佐為)は美努王を父、県犬養橘三千代を母とする奈良時代の貴族で

葛城王(橘諸兄)の実弟で、光明皇后とも母を同じくします。養老5(721)年に当時の皇太子首皇子の教育係に任命され、皇子が聖武天皇として即位した後も侍従

【訳】 ご飯を食べてもおいしくない。うろろう歩き回っても心が安まらない。あかね色に照り映えるよ。うなあなたのが忘れられない。

(県立万葉文化館主任 研究員・竹内亮)

次回回は3月10日

として天皇に仕えたことから、故事に明るく教養と人格を兼ね備えた人物であったことがうかがえます。この歌と物語は、佐為王のそうした人物像をリアルに実感できる逸話として、奈良時代の人々に受け入れられていたのでしょう。